

超未熟児の退院後のサポート実態

—超未熟児の学齢期までのフォローから—

研究協力者 竹内 徹²⁾
共同研究者 小林美智子¹⁾ 臼井キミカ⁵⁾ 中村裕美子⁵⁾
中田 智子⁵⁾ 津村 寿子⁵⁾ 中西 真弓¹⁾
安枝 敦子¹⁾ 田辺 浩子³⁾ 藤村 正哲²⁾
二木 康之⁴⁾

要約: 当センターでは新生児科退院児に発達外来を実施し総合健診を定期的に行うとともに、心理社会的ケアを保健所と連携して実施している。学齢期健診を受診した超未熟児についてそれまでのフォローやサポートの実際を分析した。

見出し語: 超未熟児フォローシステム、心理社会的ケア、医療と保健の連携、超未熟児の長期予後

調査方法と対象: 1990年8月に学齢期に達した超未熟児の健診を実施した。内容は新生児・小児神経・眼・耳鼻・口腔外科診察と心理検査・体育・保健婦相談である。そこで実施した親へのアンケートと保健婦面接で把握したフォロー実態と、地域保健室ファイルの経過から分析した。対象は1981年10月—1988年3月に出生し当センターを退院した超未熟児61人である。この間の入院数は86人で死亡25人、死亡率は27.7%である。受診は33人(生存退院の54%)で、今回は保健婦面接した32人についての分析である。

結果と考察:

(1) 学齢期健診からみる児と家族の状況

学齢期健診受診の有無と心理社会的問題: 受診児と未受診児を、それまでの把握事項からみると、児の状況では受診児に男児が多い。発達上の問題がある児の数には差が無かった。被虐待児や養護施設入所児の多くは未受診である。家族状況では受診児では出生時の父母の年齢が30歳以上が多く、母の慢性疾患歴が高率である。経済困窮からの養育問題があった児の受診は少ない。

1) 大阪府立母子保健総合医療センター企画調査部地域保健室・2) 新生児科・3) 心理・4) 小児神経科
5) 大阪府立公衆衛生専門学校保健部

発達上の問題の状況：重症心身障害や脳性麻痺や肢体不自由児の受診は少なく、ミニマルCP精神発達の遅れや学習障害疑い児の受診は多かった。61人の今回を含めて把握できた発達上の問題は、重症心身障害児3.3%、脳性麻痺8.2%、IQ ≤ 70が6.6%、70 < IQ ≤ 85が6.6%、知的発達は正常範囲であるが学習障害疑い14.8%である。

(2) センターの発達外来利用状況

発達外来受診状況：学齢期健診受診児では発達外来受診は100%で平均回数12.0回であり、未受診児では95%で9.9回である。各健診時に中断児にも連絡し受診を促しているが、受診率は年齢と共に低下する。

発達外来に期待する内容：発達外来に期待する内容は、成長発達の評価、次いで疾病障害の早期発見である。

発達外来は何歳まで必要か?：発達上の問題を持つ児は小学生から中学生までを望むものが多く、発達上の問題がない親の希望は3歳—就学までである。

(3) 保健所の利用状況

保健婦家庭訪問回数：保健所保健婦の家庭訪問回数は1—2回か4—5回が多い。発達上の問題の有無による差はみられない。

家庭訪問の最終年齢：0歳が16%で、3歳以上は少ない。発達上の問題の有無での差はあまりない。このことから、フォロー中の新たな問

題発生時には、再度の依頼が必要であろう。

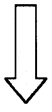
家庭訪問に対する親の評価：「役に立たない」が2人だが、多くは「安心した」「役に立った」と言い、「頼りにした」が2人いる。発達上の問題を持つ方に好評価傾向がみられる。保健婦の再教育でさらに期待しうると考える。

保健所や市町村の乳幼児健診：公的乳幼児健診を受診した児は少ないが、1歳半や3歳などは受診が増える。しかし「役に立たぬ」とするものが多く、対策が必要に思われる。できるだけ平行して受診することを当センターでは勧めている。

(4) 利用した関係機関の状況

育児や躾の専門家の相談者：育児や躾についての相談者が、「あり」が72%で「なし」が28%ある。多いのは、センター保健婦47%、センター主治医40%、保健所保健婦38%であり、ホームドクターは3%である。発達問題がある児の「その他」は心理や障害児施設職員が多い。「ない」人を無くすためにセンター内での相談機能高めるとともに、身近に利用できる保健所や診療所とのネットワークをさらに強める必要があるだろう。

今までに利用してきた関係機関：センター以外に利用してきた関係機関は、保健所(94%)他病院(66%)、幼稚園(53%)、保育所(38%)、スポーツやスイミング教室(25%)の順であった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:当センターでは新生児科退院児に発達外来を実施し総合健診を定期的に行うとともに、心理社会的ケアを保健所と連携して実施している。学齢期健診を受診した超未熟児についてそれまでのフォローやサポートの実際を分析した。